

## 「雰囲気のかたち」—見えないもの、形のないもの、そしてここにあるもの うらわ美術館 会期:2022年11月15(火)~2023年1月15(日)

■多世代交流ワークショップ:2023年1月8日(日) 午後の部:14:00~15:20 ■参加者:5名(大人3名、子ども2名)



1月8日、うらわ美術館の「多世代交流ワークショップ ミテミルラボ〜「雰囲気」をミテミル〜」にSMFの一員として参加兼取材をさせていただいた。大人3名、子ども2名が参加して始まる。まずはテーブルを囲んで顔合わせ。参加者はそれぞれ「マリリン」、「あき」、「みさき」、「ゆりな」、「かの」という「呼んで欲しい名前」を書いて首から下げ自己紹介。「みさき」さんは、はきははした小4の女の子で、すでに目がキラキラしている。

会場を見る前に、ちょっとしたゲームを行う。作品の写真が20枚ほど机に置かれて、

「さてこの作品の写真を見て、雰囲気のかたちを2枚選んで、どこが似ているのかを言葉にしてミテね!」というもの。5人でまじまじとみながら、「それぞれ星座にミえる」「不安感が共通している」「点々が表されている」「色がカラフル」、「はっきりしてなくてぼんやりとした感じが好き」など、闊達にあるいはゆっくり考え、少女はお母さんに耳打ちして代弁してもらいながら自分の感覚を伝え合う。「みさき」さんは堂々と自分の感じたことを言葉にしている。それを聞きながら「ああ、そうだね、それって私も子どものころ感じ取ったこと…」と密かに思う。心の底の片すみの小さな箱を開けたような気持ちだった。

期待が高まったところで会場へと足を踏み入れる。そしてガラスの奥の掛け軸のような古典的な作品の前に導かれる。菱田春草の「伏姫(常磐津)」という作品が今日の対話型鑑賞の最初の対象だった。古風な女性が白っぽい着物で水際を歩いている、手には数珠。大木の梢が薄暗い水面に映っている。これって…、アレ? 自殺とか? いやいや新年早々口にしていいのかな、だったら、そうじゃない状況の絵なのかと、あれこれ思い悩んでいると、「マリリン」さんがあっさり「水面が暗いし、うーん、入水ですか」と言ってくれたので、それに乗りかきホッとす。

「これって湖かな? 海かな?」。その絵の下半分を占める水面に話が進む。海にしては砂浜が無い、広葉樹の大木がこんな水際に生えている訳ない、そもそも波が無いよ、っていうことで湖に落ち着く。そこで「みさき」さんが水面に月か何かの白いものが描かれているみたい、という誰も気付かなかった鋭い指摘をして、みんなを驚愕させる! 「ええっ!?」となって一斉に覗き込むが、私には

丸いシミのようにも見えたり。

後から思えば、感じたことをいろいろ言えた解放感から、自殺にしても月にしても真相を突き詰める気持ちもうやむやになり、さあさあ次へと促されていったような。感じたことを言葉にして聞き合うことが重要であって、真実はまた別の話ということだと。知らないからこそ面白い、知っていて知らないふりをすれば途端に空疎になる。知っていることも価値はあるけれど知らないってことも、白紙ってことも別枠で尊いことだと思う。

次の対象は「瑛九」の点描画「ながれ—たそがれ」という作品。大きな画面いっぱい様々な色の点々が埋め尽くされている。「ここにキラがいる」、「全体が宇宙」、「森を上から見て」、「たそがれの家路を急ぐ雑踏じゃないの?」など口々に発する。それぞれ抽象画なので、どういふ風にでも取れる。自分事に受け止めて感動すればよいと思う。その人なりの器の中で受け取ればよいと思う。

「人は対象から何かを汲み出しているのではなく、自分の中から汲み出しているのだ。そのものに触発されて、自分の中で応じるものを自分で見出しているのだ。つまり豊かなものを探すことではなく、自分を豊かにすることに意味があるのだ。」とはニーチェの言葉。た、たしかに。

最後の対象は「犬から出る水蒸気」という鉄製の立体作品。作者は若林奮。これは手強かった! 現代アートの面目躍如、対話型鑑賞的に待ってました! とも言えそうな。要するに難解? 「水蒸気」はポコポコした泡みたいな形だとして、「犬」とは? 何かしらのヒントを得ようとみんな作品のまわりをうろうろする。「マリリン」さんが唐突に「あっ! 顔がある!」と小さく叫ぶ。「顔—? ど、どこに—?」とみんな。「あそこが目であれが鼻で…、顔にミえるよ。」「あー、ミ、えるかな」、「うーん、どこだろう」、「顔ね—?」。瑛九の時はそれぞれのイメージを面白がったのに、立体になるとなんだか急にシビアになった。

終了後の感想は、「ほかの人の感想を聞いてよかった」、「感じたことを言葉にするのは難しかった」。一事が万事、感じたことを言葉にするのは難しい。でも対話型鑑賞という関わり方でそれは少し鍛えられたかも知れない。

うまく言葉に出来ないからアートという表現があるのだと思うけれど、鑑賞者は言葉に出来ないアートを、言葉というツールで翻訳し楽しみながら理解を深めることで鑑賞者自らの感受性をも耕しているとするなら、「積極的な受け身」という行き方もいいものだなあと思う。うらわ美術館のご関係者様、貴重な体験をありがとうございました。



それぞれ  
星座にミえる



これって湖かな?  
海かな?



森を上から  
見て?



あっ! 顔がある!

